哲學研究　第二十八號　第三卷第七冊

心情の無限

西晋一郎

次に述べんとする心情を無限と名狀するは名の濫用なるかも知れぬ。併し數理論理の上で無限を論ずるにしても、無限其物は畢竟之を心證する外なきに拘はらず之を論ずることの出來ると同じやうに、又心情の無限を論述することも出來よう。但し情の論述と數理論理の推究とは、其趣きは全然違つてをるのは當然である。又心證といふことになれば、到る處に其が出來るのが無限の性質であるべき故、數理論理に於ても之に逢着し得べきならんが(其時は數理論理其物が何等かの新光明に照らさるゝことと思はる)、情の上では猶更然ることと思ふ。

偖無限の情としてこゝに述べんとするは感謝の情を主として言ふ。たとへば無

限の感謝の情といふは、親の御恩は實に三拜九拜幾重に之を頂いても足らぬ氣がする。親のためならば之を負ふて千里の外に歩んでも遠いとは思はぬ。いかほど親切を盡し骨を折つてもまだ足らぬと思ふ、其盡きぬ思をいふ。之を內にしては有難く尊くいとほしく思ふ心の息むときなき故、之を外にしては之がために盡して到らぬ隈もなく、注意の屆かぬ所なく、さまざまに心を碎いて其の際限を知らぬのであらう。之を念ふ心の寸時の隙もない內面性から見れば、これはうつかりして居つた、濟まぬことであつたと殘念に思ふほどの缺陷がないから、一種自ら安んずる所があるであらう。これだけ盡したから滿足であるといふのではなく、只念々忘れぬ所に卽今の滿足を覺えるのであらう。併し忘れる隙がないからいかほど盡しても足らぬ心地して、これでもうよいとは毛頭思はず、果てしも知らず奉仕するのであらう。一面當下の滿足はありながら他の一面どこまでも足らぬと思ふ。二者は畢竟一と思はれる。滿足せず際限なく奉仕のさまざまに出づるは無限の情の外に向つての發展創造といふべく、卽今の充足の態が無限をたたへてをるとでもいふべきであらうか。さうであれば心情の無限は有限個々の心情の裡に到る處に常に現前し得るので、必ずしも際限なく進展するを俟ちはせぬ。寧ろ左樣に進展するは無限の必然的

發現であつて、無限其物は卽今現前すともいふべきであらうか。感慨無量と形容せらるゝ情態裏すぐに無限であつて、無量の實現を俟つて始て無限なるではなからう。蓋し如何程に思ふも人の爲すわざには限りあれば、無量は現實となれぬものである。現はれた奉仕の若干の量にも、又其量の一部分にも、無限は缺損なく均しく現前し得るので、只其態度如何によることと思はれる。かく量の多寡には無限は拘はらぬから、又量を積んだのみで無限に到るものでもなからう。卽ち如何程多くの歲月多く奉仕したとて、それが必ずしも無限の感謝の現はれであるとは謂へず、又それによりて必ず無限の感謝を覺えることが出來るともいはれぬ。主觀的に見ればそれが必ずかの自ら安んずることも出來るほどの純感謝の心情と相應してをるとはいはれぬ。之に反して不幸にして盡す時短く、奉仕する所少なくとも、感謝の念の充周無隙に到らば一種無限の趣は會するのであらう。一朝にして無限の感謝を覺えたらば、此情を實にする奉仕の時は得ずとも、內面的には既に人間親子の間に存する或る眞理に到つたので、かの多年奉仕はして來たが只務めたばかりであるものよりも、孝の眞理はよく會得したと謂つてもよからう。（但し固より實行はどうでもよいと云ふ如きことではない。いよいよ切に實行を求めるのである。）蓋し經驗的事實ならば

如何に多く之を集めても無限は得られぬ。經驗的事實とこゝに言ふのは、夫の獨逸唯心論者の所謂感性及抽象的悟性の働のみによつて現はれた事實をいふ。卽ち親の御恩を被り來つた事柄を次ぎから次ぎへと數へ來り思い積つて見るばかりでは、たとへ夫の父母重恩經に見ゆる如くに懇切に說き盡し描き盡しても、只多くの御勞苦の程を感知するといふに止まるかも知れぬので、必ず無限の感謝を發するに極まつてをらぬ。しかのみならず若し斯樣な仕方のみで恩を見るならば、子のために盡したことの厚薄長短によつて親に對する情に深淺の相違生じ、從て報恩にも厚薄があつてもよい、否あるべきであるなどといふことになりはせぬか。特に若しかゝる不慈の仕業もあつたなどと事實を數へ來らば、感恩の念は起らぬといふのであらうか。斯くして感謝は經驗的事跡のみに起因するものとせば、孝は普遍的妥當なるものでなくなりはせぬか。又或は現にかく考へる者もあるかも知れぬ。

然るに一旦無限の感謝に逢着したときは如何。經驗的事實の如何のみに因つて起つたものでないから、此情を覺えたときは、親の我がための勞苦如何は左まで眼中にないであらう。其厚薄長短は此情の力を左右しないであらう。却て親の我に對する不慈の所行も、其外或は貪欲嫉妬忿怒の如きも、皆悉くいじらしきものとして見

はれ來り、皆悉く眞理の光を放つやうに思はれて來るであらう。親の事實上爲したことの如何は眼中に無く、凡そ親の生涯は卽ち全く我のためのもの、我の存生は卽ち親の賜であるといふはつきりした直觀が不可抗的に此無限の感謝と共に出現するではなからうか。人間親子の意義が一朝にして明白疑なく、最早や恩の多少慈不慈の事跡は言ふに足らぬ慨があるではなからうか。こゝに於て果てしも知らず奉仕する努力が出るのであらう。經驗的事跡としては到底有量なる恩に對してかくも無量の思あるは何故であらうか。こゝに於て人間親子の意義は、只之を生物的自然的生活として見るばかりでは、卽ち所謂感性及抽象思想によつて見るばかりでは得られぬことを知るであらう。古來父子の理などと言つてあるが、此理は只所謂理性のみが眞に之を捉へるのではなからうか。特に無限の感謝の裡にあつては、親の不慈も煩惱も實にいじらしく感ぜられ、悉く眞理の光に浴して見はれ來るは宗敎的感情そのまゝとも思はれる。かの西洋の中世にグレゴールスは患難疾痛の最中にも神の有難さを覺ゆるのが立派なる生活である旨を述べたとのことであるが、神恩の無究を感じては惡心も眞理の光を放つて見えるといふことであらうか。若し經驗的に世界人生裡の吉凶禍福榮辱存亡利害損得を數へて居れば全愛の神を信ずるこ

とは出來ぬわけである。

此無限の感謝に應じて無限の愛があるべきである。經驗的事實としては、親の愛が有限不完全であり、或は却て不慈の行に出づることがあつても、若し本來此愛は只時間的に止まる性質のものでなく、所謂其理は無限の愛であるならば、元來只經驗的に恩愛を感ずるのみでは起るべきでない所の無限の感謝は、正さに此無限の愛に相應するものであらう。理として無限である親の愛を、よく此理を完うして時間的に實現するか否かは、親としての人々個々の生活の深淺純否によることであらう。無限の感謝の理を經驗界に十全に表するか否かは、子としての人々個々の生活の眞面目如何によることであらう。故に親の仕業が厚かつたから感謝も厚く、薄かつたから薄いといふやうに、比例交換的であるにきまつてはをらぬ。而して事實も亦かく示すのである。

親の愛は理に於ては(ヘーゲルの所謂アン、ジヒには)無限であらう。併し總ての親は此愛の發現には居つても、其理を總ての親が自ら會得してをるのではなからう。只實行の上では親の其子を愛するほど無限の情に近いものはない。シャンドは愛は情ではなく情の體系である、其對象の一相に限られずして其の全體を開展して見

んとするものであると說いて居るが、體系なるものは其性質として無量に發展せんとする內的生命を包藏して、然も體系なるが故其發展の各相に於て完體を呈して居る。此力によつて、親は時間的に兒を生育し愛護して、老の將さに至らんとするを忘れてをる。子に就いては千萬無量の思があるであらう。ホジソンは情に此發展生長構造創成の力の有るか無きかを準據として其情の道德的なるか否かを檢すべしと論じてをつたと思ふが、謂はれあることと思ふ。併し理としては、アンジヒには、無限の愛であつても、此趣を自ら會せずして只其發現に乘ずるのみであれば、往々我が子に私する態となる。特に若し其子の時間的存在の或る一相に固着してそこに愛を生ずるならば、直ちに依怙となり私となり、子を愛するのではなく、其實自己を愛して居ることになりはせぬか。かの無限の感謝を覺えるのは我が親に私するとは天地相隔たつてをる。人間親子の普通の理に會するので、所謂我が父を敬するは天下の人の父たるものを敬する所以であるといふのはこのことであらう。其れ故に又無限の感謝を覺えて、翻つて我が子に對するときは、最早や私愛ではない筈である。子に對する慈愛も親に對する感謝も理としては等しく無限であらうが、其無限の趣きに自ら逢着するのは多くは感謝の方に於てであるといふ事實に就いては、哲學的

論明の必ずあり得ることと思ふ。事實としては無限の感謝の裡には一切の心情、其善不善を問はず、悉く皆眞理の光をあびて見はるといふのは、蓋し這裡には一切有限に對する固着が脱落して、一切が其本來の相に於て見はれて來るといふことであらうか。果して然りとせば、無限の感謝は(從て無限の慈愛も)轉變の相につれて去來するものでなく、消盡すべきものでない。王陽明の龍場に困臥せる時であつたか、具さに難苦を嘗めて一切の世情悉く脱落せる思をなせるに、獨り其父を懷ふの念明らかなるを覺えて、親子の理の無究なるを會したと自ら言つてをる。

凡そ如何なる情と雖も其動いてをる間は盡きぬ思をなすこともあらうが、之を喚起した事相に局せられて居る限り、必然消散する期がなければならぬ。かのスピノザの解剖せる夥しき情念も睿知に照されては悉く轉退し、夫の百八煩惱も皆其影を潛めて仕舞ふ性質のものとせられてをる。時間的存在の特殊相に遭ふて生ずる喜怒哀樂ならば、其相の過ぎ去るに隨つて消散して永く留まらぬ。樂地を離れば樂みも亦盡きる。かの岳陽樓の記に、濁浪天に漲り薄暮蕭々の時は鄉を懷つて萬斛の涙を濺ぎ、春光融々萬里一望の時は愁を忘れ悠然快適であるが、かゝる寧ろ詩的の境涯も、古へ仁人の心は此所にあらずして、江湖の遠きにあれば君を思ひ廟堂の高きにあ

ば民を思ふと書いてあるが、蓋し彼は境來つて生じ境去つて滅する情である。

感謝と慈愛の無限は內は常に充周して間隙無く、外は常に際限なく創造する性質のもの故、至つてやさしいものである。寸隙があつても其を自ら傷たみ悲しみ、自己の些の怠慢も直ちに之を見つけて、之を責むること秋霜烈日の如きものがある。罪惡の感は心のやさしい所から起る。自ら責めて償はねば濟まぬので、人が赦す赦さぬなどに拘はつたことでない。其嚴正なること思惟の論理法の嚴正なると同じく、然かも自ら別趣があると思はれる。懇切充周、到らぬ隈もなく流通する情であるから、事に觸れ境に接してそれぞれ其必然の感を發して過つなく遺漏あるなく、自ら嚴正なる條理を具すると思はれる。此情の條理は固より抽象的法則ではなく具體的であつて、現はれては有德者の足跡である。吾人の生活の千緒萬端之に應接して、それぞれ中正の處置を失はず、道德の條理を紊ることなきを得るは、只此至柔の情之を然らしめるのであらうかと思ふ。宋の范文正は其母を失つたときまだ家貧であつたため、後に將相にまで進んだが終身賓客あるにあらざれば食に肉を重ねなかつたと傳へられてゐる。身を終るまで奪ふべからざるものあるは母に對する至情の自然に必然に然らしむる所であらうから、至てやさしい心は剛なる働をする。かゝる

人から見れば、吾々日常の心情の多くはいかにも粗雜荒凉殘忍薄弱なるものであるであらう。吾々の粗なる思惟が思惟の法に背いて嚴正なるべき學術を傷つくるにもまして、吾人は自己のいかに殘忍無情であるかに氣付かず、情の理法を蹂躙して平然としてをるのであらう。之によつて考へて見れば眞理は至つて柔和なもので、其緻密にして堅き理法、其電光の如き機鋒は、吾人の粗暴輕燥なる心情の眼には逸して仕舞ふのであらう。宇宙の奥底はいかほどやさしきものであらうか想像だも及ばぬことである。(終)